

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：34420

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13106

研究課題名（和文）南北朝期室町幕府機構と官僚制の研究

研究課題名（英文）Study of the Muromachi Shogunate Organization and the bureaucracy during the Northern and Southern Dynasties

研究代表者

河原 誠（田中誠）（Kawahara, Makoto）

四天王寺大学・社会学部・講師

研究者番号：20791437

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、室町幕府の評定衆・奉行人、すなわち官僚に着目して、その地位や機能の変化から幕府権力の展開過程を明らかにするものである。本研究においては、まず飯尾氏・松田氏ら室町幕府奉行人の個別活動を追い、将軍・管領との結合形態を明らかにした。加えて彼らの持つ役割として幕府公文書の作成・文書管理の在り方を検討し、南北朝期に鎌倉幕府の文書管理方法が廃れ、奉行人が重要な位置を占めることを明らかにした。次に、彼らが保管する行政文書だけでなく学問に資する典籍に着目し、学術的な関心の在り方を検討した。最後に鎌倉期の評定衆を中心に武芸の習得や軍事活動の在り方を検討し、鎌倉末期には指揮官に登用されたことを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

以上の成果は、すべて学術雑誌や書籍において発表した。一部はオンライン雑誌であり、誰にでも閲覧できるような媒体に発表した。またその一部成果をYou Tube（ジャンプチャンネル、逃げ上手の若君関連）の動画において発表し、一般に還元した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the Muromachi Shogunate's councilors and magistrates, or bureaucrats, to clarify the development process of the Shogunate's power based on changes in their positions and functions. This study first traces the individual activities of the Muromachi shogunate magistrates, including the Inoo and Matsuda clans, and clarifies how they were connected to the Shogun and the Kanrei. In addition, we examined the way in which official documents of the shogunate were created and managed, and clarified that the magistrate occupied an important position. Next, we focused on not only the administrative documents kept by these magistrates, but also on the books that contributed to scholarship, and examined where their scholarly interest lay. Finally, we examined the way they learned martial arts and engaged in military activities, focusing on the reviewers of the Kamakura period, and clarified that they were promoted to commanders by the end of the Kamakura period.

研究分野：日本中世史

キーワード：室町幕府 将軍 官僚 評定衆 奉行人 文書管理 学問

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本中世は武士が列島の大部分を支配した社会であり、幕府支配機構の解明が幕府権力の特質を解明する重要な課題とされてきた。戦後直後には在地領主権力が重視され、室町将軍は脆弱な統治権力とみなされてきた。しかし独自の権力基盤—「武官」の奉公衆と、文書行政を担う「官僚」の評定衆・奉行人—に立脚する将軍権力の独自性が明らかにされ（佐藤 1963）、中世幕府論において官僚制が重要な論点として浮上した。以降、鎌倉幕府・六波羅探題機構とその官僚層の特質の解明が進み（森 2016）、室町幕府では 6 代将軍義教期（1428—1441 年）の奉行人権力の向上が将軍権力再編の画期と指摘された（今谷 1982）。

しかし、室町幕府の官僚層、とりわけ奉行人に関しては 6 代義教期が画期とみなされていたために初代尊氏～4 代義持期（1336—1427 年）の研究が乏しい。鎌倉幕府崩壊から南北朝内乱、室町幕府の確立といった列島規模の社会変動と幕府官僚層の動向を関連付けて、その歴史的特質を追究する視角が先学に欠けていた点が問題である。制度史の視点からも南北朝内乱を境に、鎌倉幕府的な会議による合議に基づいた幕府機関の政務決裁方式が大きく変わり、奉行人が将軍に個別に決裁をあおぐ方式に変わる（山田 2006）。換言すれば文書発給過程における奉行人の地位が変化したといえるのであるが、では具体的にどのように変わったのか、政務運営上の位置づけはなお検討の余地がある。また同時並行的に進められた職制改革や官僚の昇進制度との連関についてはほとんど手つかずであり、これらを合わせて検討することで幕府の権力構造について官僚制を軸に捉えなおすことができると考えられる。

また、近年の室町期研究においては足利将軍を天皇・公家をも支配下においた超越的な権力＝室町殿とみなしている。これは足利義満以降の公家支配を検討した結果の成果である（中世後期研究会 2010）。しかし、これらの研究は管領や諸大名、官僚を含む将軍（室町殿）直臣との関係、換言すれば武家支配との関連を十分に踏まえたものであるとはいえない。もともと室町殿論は「脆弱な足利将軍」イメージを克服する過程で出てきた経緯があるが、近年では過度に室町殿の超越性が強調されるきらいがある点も問題である。

2. 研究の目的

本研究は室町幕府官僚制の成立・展開過程を制度史的な視点から考察し、幕府権力構造の実態を明らかにする。その際には従来から重視されてきた室町幕府将軍—官僚の関係だけでなく、管領・諸大名—官僚といった複線的な視点から官僚制の展開を追究することで幕府権力の構造を複眼的にとらえることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、申請者がすでに公表している奉行人の在職考証に基づき室町幕府の官僚の多様な実態を活写するものであり、彼等の活動実態を明らかにすることで、近年研究の進展している官僚層を含めた将軍直臣研究に見直しを迫るものである。

具体的には鎌倉期からの変化を踏まえて武家官僚制の形成過程を追究することで、鎌倉幕府から室町幕府的組織への転換過程を再検討することができる。また大名と「兼参奉行人」の関係に着目することで、公武関係史研究によって形成された絶対的な将軍（室町殿）イメージをも更新することができる。同時に大名家に仕える官僚一族との関係も視野に入ってくるため、官僚層を軸に将軍—大名の関係の在り方についても再考を促す成果を生むと考えられる。

4. 研究成果

1、田中誠「室町幕府奉行人飯尾氏の基礎的研究—南北朝期を中心に—」『古文書研究』（92）1-18 2021 年 12 月

本稿においては、室町幕府奉行人の中でももっとも繁栄した飯尾氏を取り上げて、南北朝期における活動実態、幕府上層部との結合形態を検討した。飯尾氏は鎌倉幕府問注所三善氏の一族で阿波国飯尾を名字の地とする。六波羅探題奉行人としても活動し、建武政権から室町幕府へと渡り歩き、初期においてすでに 4 流の家に分かれて繁栄した。観応擾乱期には尊氏派・直義派に分裂し、直義派についた一流はその後没落を余儀なくされた。

2 代将軍足利義詮が死去し細川頼之が阿波国から上洛した。阿波国は細川氏の南北朝初期からの守護分国であり、飯尾氏も細川氏の一部被官となっていた。美濃守を称する家は、細川頼之の被官であり、頼之の権力基盤として奉行人に復活を果たした。義満期には多くが評定衆となり後の繁栄の基礎となった。飯尾氏は本領の阿波を介して管領細川氏と関係が深く、奉行人としての出世にも細川氏の影響が大きいことを明らかにした。

2、田中誠「室町幕府奉行人丹後松田氏の研究—南北朝期を中心に—」『立命館文学』（677）

pp. 184-203 2022年3月

本稿では丹後国御家人出身で六波羅奉行人であった松田氏の活動を追究した。松田氏は飯尾氏とはことなり守護との関係は薄く、將軍直臣として発展した。しかし一族には若狭に所領を持つものも多く、若狭に下向して土着した一族も存在した。初期においては、松田氏はさほど有力な氏族ではなかったが、丹後守を称する一族の松田貞秀が義満の御産奉行となって以降、義満の成長とともに頭角を現し、有力な氏族に成長した。特に貞秀は政所執事代や評定衆など重役を担い、義満にも意見できるような地位に昇った側近であった。

貞秀には歌集が残されていたことが知られていたが、京都市歴史資料館所蔵立入家文書所収松田貞秀歌集を調査したところ、自筆歌集である可能性が高まり、和歌研究にも寄与する成果をあげた。

3、田中誠「室町幕府の文書管理—南北朝～室町初期を中心に—」『アーカイブズ学研究』(36) pp. 4-23 2022年6月

本稿では、個別氏族の動向を追究するのではなく、官僚層の役割として文書管理に着目した。先学では鎌倉幕府後期の文書管理体制が明らかにされていたが、室町幕府への継承という点は未詳であった。鎌倉幕府では政権所在地に文庫が置かれ、公文書が集中的に管理される体制であり、利用者による複写も可能であった。対して室町幕府では初期はそうした体制が継承されたが、観応擾乱期に幕府文庫を管理していた問注所執事太田氏が没落したことや訴訟制度の変化から文書を集中管理する体制は崩壊した。またこうした文書の利用として紛失安堵に着目し、安堵権を持たないとされた足利尊氏もこれに関与しており、尊氏の処理方法が継承されることを明らかにした。

南北朝後期には將軍発給文書が公家社会由来の公文書から、私文書系統に移っていくに伴い、書札を整備する必要が生じた。そこで文書作成を担う奉行人層では、文書の控えを作成し、符案として保管する措置が取られた。これとは別に政務の記録も個別に作成する手続きが取られた。これらが義教期の御前落居記録・奉書につながっていくことを解明した。

4、田中誠「国立公文書館内閣文庫所蔵室町幕府奉行人清元定筆『御元服聞書』」『古文書研究』94号 pp. 62-79 2022年12月

本稿は、戦国期の奉行人清元定が作成した11代將軍足利義澄の元服記を紹介したものである。清元定はこの他にも多くの史料を書写しており、応仁の乱で荒廃した武家の再興を記録管理の面からはかろうとした可能性を指摘した。

5、田中誠「斎藤唯浄の『御成敗式目』注釈と幕府奉行人の学問」『Antitled』(2) pp. 35-62 2023年3月

本稿は、六波羅探題奉行人であった斎藤唯浄(俗名基茂)が著した御成敗式目注釈書である『関東御式目』にみえる漢籍を中心に、奉行人の学問のあり方について検討したものである。『関東御式目』は多くの漢籍を用いて、式目の注釈をつけていることは知られていたが、どのような漢籍を使っているかを、他の事例も踏まえ検討した。評定衆・奉行人は和書も含め多くの典籍を書写・貸借しており、唯浄も多くの漢籍を所持していた。しかし、式目注釈に用いているのは、五経(易を除く)と二史(史記・漢書)を中心とした朝廷の博士家によって施行されたものであることがわかった。唯一の例外が、和漢朗詠集であり、これも和書の中でも博士家の読みがあるもので、そうした博士家の権威を背景に注釈をつけたものであることがわかった。こうした注釈は荒唐無稽と思われるが、唯浄が生きた鎌倉後期に起こっていた社会問題を念頭に置いた注釈である可能性もあり、実務と注釈との距離は意外と近いのではないかと指摘した。これによって公文書だけでなく、典籍類の所蔵状況や貸借のあり方の実態解明に寄与することができた。

6、田中誠「文士と武士—鎌倉幕府評定衆家の軍事—」倉本一宏編『貴族とは何か、武士とは何か』 pp. 269-293 2024年2月

本稿は、『吾妻鏡』にみえる文士=評定衆・奉行人の武芸習得や軍事活動について検討したものである。先学では武士論的視角において、文士は例外とされていたが、鎌倉後期には文士出身者が軍事活動を活発に行っており、なぜそのような活動が可能となったかを問うものである。

鎌倉期における文士は武士に比べ武家社会の中では劣位に置かれていたが、二階堂氏や大江氏を中心に流鏑馬など武芸を身に着けていったこと、大番役勤仕などを通じて武士としての認知を高めたこと、鎌倉中後期には実戦に参加していたことなどを解明し、鎌倉後期までに指揮官として相応しい地位に至ったことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中誠	4. 巻 36
2. 論文標題 室町幕府の文書管理：南北朝-室町初期を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アーカイブズ学研究	6. 最初と最後の頁 4-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32239/archivalscience.36.0_4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中 誠	4. 巻 2
2. 論文標題 斎藤唯浄の『御成敗式目』注釈と幕府奉行人の学問	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Antitled	6. 最初と最後の頁 35-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57269/antitled.2.0_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中誠	4. 巻 94
2. 論文標題 国立公文書館内閣文庫所蔵室町幕府奉行人清元定筆『御元服聞書』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古文書研究	6. 最初と最後の頁 62-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中誠	4. 巻 870
2. 論文標題 歴史マンガと日本中世史	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中誠	4. 巻 92
2. 論文標題 室町幕府奉行人飯尾氏の基礎的研究：南北朝期を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古文書研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中誠	4. 巻 677
2. 論文標題 室町幕府奉行人丹後松田氏の研究：南北朝期を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 686-705
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中誠
2. 発表標題 式目注釈と奉行人の学問
3. 学会等名 Antitled友の会第1回研究大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 木下昌規、久水俊和編（田中誠）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 340
3. 書名 足利将軍事典	

1. 著者名 野口実編 (田中誠)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 戎光祥出版	5. 総ページ数 181
3. 書名 図説鎌倉北条氏	

1. 著者名 黄雷龍・堀川康史編 (田中誠)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 304
3. 書名 海外の日本中世史研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------